
雨の電話

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の電話

【Nコード】

N1018N

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

鳴らない電話を握り締めている。

たった一度だけあの人からかかってきた夜中の電話。

わたしはそれをもう一度と願って、眠れない雨の夜を過ごす。

あの人わたしの手には入らない人。

わたしの片恋はどこまでも、一方通行のまま。

夜半過ぎからの雨はやわらかい。遠くで救急車のサイレンの音がする。それは雨ににじんで夢か現か、分らない曖昧さで響く。

雨の日のアスファルトは信号機の青や赤をじんわりと溶かして映す。小さな水たまりに潜り込む、灯りと。そういうものを想像して無意識だと信じたつもりで手に取った携帯電話から目を逸らそうとする。

鳴らない電話。

今夜も。

八時の時点で想像して。

九時の時点で期待して。

十時の時点で焦れはじめ。

十一時に落ち着かなくなつて。

十二時に哀しみと怒りと絶望を混ぜた諦めを自分に言い聞かせる。たとえば、百通のメールより、ひとことの声だけでいいから聞きたい夜がある。電話の向こうでためらいがちに口を開くあの人を思う。一瞬の間、微かに笑う雰囲気、ほとんど空気ばかりの声がわたしの耳に流れ込んでとろける、あの幸福感。

鳴らないと仮定して日々を過ごすことに慣れているはずなのに、時折。やたらと夜風が涼しい日だとか、雨の淋しい夜だとか、どうして自分がひとりでいるのか混乱するくらい孤独な気持ちの夜とか。夜は良くない、感情の負の部分ばかりが淋しい淋しいと集まって、気がつけば手遅れになるほど巨大に膨らんでいる。それがわたしにがばりと覆いかぶさってくるのだから、身震いするほど淋しくなってしまうのは当然で。

けれど、あの人がそうわたしに電話をしてくるのは稀なのだ、むしろほとんどない、ただ身勝手な期待が毎晩、もしかして今夜だけは、と特別に思わせたがる。

叶わない片恋。

一方通行の想い。

わたしの大好きなあの人には、すでに妻という名の存在を所有している。

口にした想いは、あの人を戸惑わせた。

揺れた視線に、後悔したのはわたしだった。

ただと言わなかったら淋しさはもっともつとわたしの中で膨らんで、どうしようもなく夜が長くなって太陽は昇らなくなってしまったはずなのだ、好き、と気持ちを言葉にして代わりに手に入れたものが、ただ単に別の種類の淋しさだったとしても。

満たされない想いは夜の空にぽっかりと穴をあけるようで、けれど本当はどこにもゆかずなにもならず停滞するばかりでゆっくりと澱む。静かに腐敗する。甘い果実の朽ちるときによく似た香りを発して。だからいけない、もっと醜悪でどろどろで悪臭を放つような朽ち方であれば、自分自身だってそんなものは嫌なのだから慌て身をひるがえすだろうに。

想いに溺れる。

見苦しく執着して手に入らないと嘆いてあがいて、苦笑を通り越して侮蔑されそうな醜さで、それでも叶わない恋は甘い。あの人視線のひとつが、指先の動きの微かさが、わたしの心を縛りつけて離さない。想いは熟してどうしようもなく匂う。錯覚させる、叶うはずのない想いを健気に抱いている自分を。幻惑させる、ひたむきにあの人を想い続ける心を。そんなものは、冷静になってみれば少しも良いものではない、ただの石ころ、がらくたの類と同じだというのに。

鳴らない電話を手の中で転がす。

洗った髪はとうの昔に乾いて、シャンプーの香りを漂わせている。

もしも、鳴ったのなら。

もしも、あの人からの電話がきたのなら。

淋しい妄想を繰り返すだけでいくつもの夜が過ぎる。

こんなにも望んでしまうのは、一度だけ、あの人から夜中の電話がきたせいだった。ほんの数ヶ月前。いつもはわたしからしかかけない電話、それでもできるだけ必要な用事を重ねて重ねて、どうしても電話以外の手段では連絡の取りようがなかったので、という顔を、かけて、かけるのに。それなのにあの方はそんなそんな周到な用意もなにもなく、なんの用事も心構えもないままわたしとの回線を繋いだ。なんかこの前言い忘れたことがあった気がするけどその内容すら忘れた、と笑って。しばらく気候の話と美味しい果物の話をして、それから不意にわたしに聞いた。どうして俺を好き、と。それが分かるのなら同じ条件のもつと手に入りやすい人をわたしは捜します、と反射的に答えると、攻撃的に取られたのかもしれない、携帯電話の向こうはやさしげな苦笑で満ちた。

ごめんな、ありがとう。

相反するふたつの言葉を自然に繋げて、あの方が口にする。

もつといい奴捜せよ。

でもありがとう。

好きになってくれてありがとう。

気持ちを返せなくてごめん。

気持ちを返すということがどういうことか分からなくて、夜の中でわたしは首を傾げた。同じだけ好きになってあげられなくて、ということなのか、好意を自分にはわたしに対して持てないということなのか、身体を差し出してはくれないということなのか。恋をするとは人は相手に身体や想いを差し出すけれど、受け取り方がわたしはよく分からない。自分のそれは簡単に手放して相手の目の前に差し出して見せられるのに。

好きでいるのは迷惑ですか。

すべてがひらがなの、棒読みみたいな他人の声だった。わたしの喉を使って、全然知らない人が話しているような。すきでいるのはめいわくですか。

そんなことない、と言わせるための言葉だった。

その卑怯さにわたしは眩暈がする、自分を恥じる。だけど許され
たがる、気持ち嬉しいと言われたい、万に一での望みがそこには
あるような気がして。

バカな女と言われたい。

さけずんで哀れまれない。

可哀想な女だと。

そうしたら、だって捨てられなくなるでしょう。捨てるも捨てな
いも、最初から手の中に入れてもらえないにしても、記憶の隅には残
る。それだけでもいい、とささやかに、けれど確実に醜くわたしは
思う。

好き、という気持ちは。

ときに刃のように膿を含んだ肌を切り裂く。

恋心は。

美しく美化された、ガラスの箱の中の永遠ではない。

「君の好意になにも返せないのは心苦しいけど、それでも好きと言
つてくれるのならそれを止める権利は俺にないよ」

欲しかった言葉を言わせる、何もいらなから今度お酒でも飲み
に行きましょうよ、と言ってみれば、それくらいなら、と答えてく
れる。わたしは相手のやさしさにつけ込む。あの人のすべてなんて
手に入らなくてもいい、ただ、わたしの知るあの人との誰も知
らない時間がほんの一分だけでもあるのなら、幸せ。

あの夜の電話はあの人とわたしだけの時間だった。他の誰も入り
込まない、知らない、秘密の夜だった。甘い言葉を交わしたわけ
もなく、言えない秘密を混ぜたわけでもない、それでも。幸せな時
間は、次を望ませる。あの人の一度の気紛れを、わたしはもう一度
と願ってしまう。

雨の夜は世界がゆっくりと冷えてゆく。熱を奪われ、黒く濡れた
アスファルトにすべては吸い込まれる。それなのに、この気持ちだ
けが。この、欲望だけが。熱を失わない。

あの人と似た人はたくさんいる。

きつと、もつと優しい人も、もつとわたしを好きになってくれる可能性のある人も、もつと素敵な人も。なのにどうしてあの人でないといけないのだろう、答えはわたしの中のどこにもない。あの人でなければならぬ理由、それが分かればわたしは自由になれるのに、あの人にはわたしの一方的な想いから解放されるのに。

淋しくて淋しくて仕方のない雨の夜に、鳴らない携帯電話を握り締めている。開けた窓からの雨音と冷たい風が、肩口を確実に冷やしてゆく。好きという感情のすべてが美しいものではない。振り返って自分の醜い影に怯えることもある、それなのに。

かけることもできない、かかってくることもない電話を握り締めて、わたしは雨音を聞いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1018n/>

雨の電話

2010年10月8日14時43分発行